

テーマ「医学部現役合格説明会」

日時：9月25日（日）

場所：栄オアシス校

対象：大学医学部受験生とその保護者

◆講演1／講師 長井 伸先生

アメリカで学んだ大切なこと一

医学を学ぶ信念と、積極的に関わって学ぶ姿勢

現在、名古屋大学医学部医学科6年生です。先ごろ、大学の留学プログラムを利用してアメリカのペンシルバニア大学へ2ヵ月間行ってきました。そこで学んだこと、感じたことを共有したいと思います。

一番伝えたいことは、積極的にコミュニケーションを取ることの大切さです。

僕はペンシルバニア大学のCHOP—Children's Hospital of Philadelphiaという世界有数の子ども病院で実習をすることになりました。初日に衝撃を受けました。日本の実習ではカリキュラムがあって、スケジュールが決まっています。それが向こうでは、朝、小児循環器の回診に入るように言われ、それが終わったらみんな知らん顔でそれぞれの業務に就きました。放置されて、日本のぬるま湯に浸かっていた僕は立ちすくみました。徐々にわかったのですが、アメリカの学生は自分から積極的に課題をもらい、どんどん吸収していきます。先生も、学生が勉強する態度を持っていて初めて、ウェルカムになります。僕も自分から申し出るうちにコンサルトのファーストタッチ、他科からの相談を受けた患者さんの状態を評価し、プランを立てて上司の先生に見せる所までやらせてもらえました。

名古屋大学で周りを見ても、医学部だから、偏差値が高いからという感覚で入学してきた人が多く、一方、アメリカは医学部に入るにはまず一般の大学を卒業する必要があり、その後に医学を学ぶため入ってきているので、気持ちが全く違います。皆さんにぜひ、そんな気持ちを持ってほしいと思います。今から将来を見据えるのもなかなか難しいかもしれませんが、単に偏差値が高いからというのではなく、自分なりの信念を持って、積極的に勉強しよう、自分から関わっていこうという思いを持ってほしいと思います。

今回の留学で、将来はアメリカにも行きたいと思いました。ただし、臨床医師として活躍するにはアメリカの国家資格が必要ですが、分野としてはがんの内科的治療をやりたいと考えています。CHOPでは血液腫瘍内科も回り、その経験からです。折しも名古屋大学では化学療法部の新しい棟を建築中で、そこで働けたらと考えています。

◆講演2 / 責任者 森浩晃

思いが現実になるから、潜在意識を鍛える

目標を合格以上に持っていく

大学に入ったらこれをやるというイメージを持ってください。すると自分がそれに近づいていきます。ブルース・リプトン氏の本には、不治の病さえ治せるというケースが出ています。1952年にある患者さんのできものを催眠療法で治しました。実はそれは不治の病だったのですが、医師も患者もそう思っていませんでした。ところがその後、不治の病と知ったら、治らなくなったといえます。思うことが現実化し、マイナスに捉えればその状態になっていきます。「お金が欲しい」と思っているはお金持ちになれない。それはお金がない自分を受け入れているから。「合格したい」という位の中途半端な肯定で合格できるほど、医学部はやさしくありません。そんな現実はどう立ち向かうか。潜在意識を変える必要があります。たとえば鏡の前で、合格して喜んでいる自分をリアルにイメージする。顕在意識よりも潜在意識は圧倒的に強く、そうすることで成功に近づきます。

また、努力してなんとか合格できるレベルまで来たら、上位3位で合格しようというように目標をシフトすると、不合格はなくなります。ギリギリでもいいから受かろうとする人がいる中、上位で合格しようと思って勉強する人は、目標も気合いの入り方も違います。高橋尚子選手がシドニーで金メダルを取った際、選手への事前インタビューの時にこれは勝てると思ったそうです。他の選手の目標よりも自分の目標がずっと高かったからです。

何があっても慌てない準備

試験開始から100%の力を出せる体制を

幸子先生がいつも「試験開始の3時間前までには起きなさい」と言いますが、それは開始時に100%の力を出せるようにしておかないと、最初の問題でミスするからです。1問目の誤答率は非常に高いです。そして、何があっても慌てないようにしておくこと。公共交通機関が使えない時にどうするかも想定しておく、100%集中できるようになります。寒さ対策の準備はみんなしますが、当塾の先生にアンケートを取ると、体を冷やすものを入れている。脳の温度が上がると思考力が下がるからです。考えられるだけの事前準備はしておく、開始直後にフル活動ができるようにするというのを、覚えておいてください。

◆講演3 / 責任者 森幸子

今回、名古屋大学の留学システムに入ったのは2人。トップがTOEFLで120点満点中104点だった長井先生、次点も以前ジェイサチで働いていた子で、スイスの大学に行きました。名古屋大学では入学式の翌日にTOEICの試験があります。名市大はTOEFLです。いずれもハイスコアが取れないと、英語強化チームに回されます。英語で表現できることは大切です。長井先生は留学先で、独特のユーモアも身に付けてきました。そしてその言葉通り、積極性が大切です。積極性がなければどこでも置いて行かれます。塾でも、質問があれば先生を捕まえて聞く。待ってはいけません。

名大医学部合格者の男女比で 女子13%というショック

今年、あるデータに衝撃を受けました。名古屋大学の合格者の男女比で、女子が13%。今までは40%ぐらいでした。なぜそこに目が行ったかと言うと、南女からたくさん落ちたからです。南山の合格者6名のうち、4名は南山男子ですから女子部はどんどん削られています。この数字、怖いと思います。真実を語っているのです。

なぜなのかをお医者さんと話したのですが、やはり偏差値だけではねられるシステムになっています。志願理由書に書かれているのが「医師になりたい」といった幼稚なのは単なる動機であって、もっと深いことが必要なのに、なかなか書けない。なぜ医師になりたいかを心から深く思っていないと、気持ちが湧き出て来ないから書けません。では、そんな人が併願校として愛知医大を受けて取ってもらえるかと言うと、余程のことがないと取ってもらえないです。

これからの医師に必要なのは、コミュニケーション能力とマネジメント能力だと思います。人工知能(AI)を使いこなせる人間しか採用してもらえません。

医師にコミュニケーション能力と マネジメント能力が求められる

息子が新人の時にいった病院で、早く検査が回ってきたので理由を技師に聞いたら、効率を考えて、処理の早い先生を先にしているということでした。マネジメント、そして人との調和、コミュニケーション。それがなくなるとうまくいかないことを実感したそうです。

日本の医療のロードマップで、2020年は個人の健康データを活用する仕組みが整えられる、35年は健康のためのまちづくりとあります。これも医療の仕事になってきます。医師が多岐にわたる情報をキャッチし、専門分野を含めてマネジメントできないと、やっていけない時代が来ます。病院勤務でも地域のコミュニティの人たちと交流し、人格的に認められないと、医師として歩んでいけません。専門家としての経験値や暗黙知として培われ

た価値観や態度、クライアントとの関係性が、より重要になっていきます。

女性には特に厳しい医学部、医師の道

現実を乗り越えていく強さが必要

従って医学部の入試ではそういう人を選びすぐっていく。そこで、名古屋大学の女性合格者が少なくなっている現実があります。

出産も子育てもあり、女性が医師を続けていくのは厳しい道です。メンバーの誰かが働けなくなるとチームの体制が崩れるので、できれば女性が入ってほしくないというのが本音です。だからそれに勝る位の健康体、エネルギーを持っていないといけません。人間として一杯学んでいないと、勉強ができてもどこかで落とす仕組みになっています。36時間、寝ないで仕事できますか？医師はそうですよ。体力も必要です。

現在、中高一貫校出身の子が医大生の8割を占めています。公立からが2割。一貫校の子が医師になると決めたのは中学までの間。高1からの準備では遅いのです。それに勝るほど勉強しているのか。粘り強さが年々薄れていっています。女子も体調なんかを勉強できない理由にしていたらダメ。男女同じ職場で仕事していくのだから。

これが現実です。娘さんが医学部を目指すなら、心を鬼にして強く育てていく必要があります。勉強を乗り越える方法は私たちがお伝えします。しかし、自分で考えて、自分から聞いてきた時に、初めて生きたアドバイスができます。

入口で見られる医師としての適性

対策は、暗黙知を増やすこと

医学部と他科を併願する人は減っています。また、現役生が受けるのは1校、2校でピンポイントです。これは、面接も小論文も全然違うからです。

岐阜大学の面接が厳しくなっており、学校推薦の場合は2回あります。なぜか。入ってきた子が医師に不適合だからです。でも、単位を取っているからやめさせることはできない。6年で1億円の損失になりますから、何とか育てなくてはならない。が、時間がかかる。だから、入口を狭くしました。早く不適合者を発見するために面接が設けられました。名古屋大学もそうですね。医者として適格なのかどうなのかを入口で見つけるようになりました。では、それに対してどうしたらいいかというと、暗黙知を増やしていくことです。予備校生は毎週月曜に話をしているので、どんどんプラスアルファができていくと思います。現役生はお家の中で、新聞を読んで家族と話すなどして、暗黙知を増やしてください。ご両親は子どものコミュニケーションに何か疑問があった時は、その都度言って、正していきましょう。そうしていないと、面接で落とされます。

*暗黙知：ハンガリー出身の化学者、哲学者、社会学者のポラニー（[Michael Polanyi 1891-1976](#)）が用いた語。暗黙知とは「**知識**というものがあるとすると、その背後には必ず暗黙の次元の「知る」という動作がある」ということを示した概念

である。

ポランニーの用語を利用した理論に[野中郁次郎](#)の「暗黙知」がある。野中は「暗黙知」という言葉の意味を「暗黙の知識」と読みかえた上で「経験や勘に基づく知識のことで、言葉などで表現が難しいもの」と定義し、それを「[形式知](#)」と対比させて知識経営論を構築した。野中は「暗黙知」を技術的次元とは別に認知的次元を含めた2つの次元に分類している。この野中の暗黙知論はポランニーの理論とは根本的に異なっており、野中独自の「工夫」と見た方が良い。

辞書によると；

人間が持つ知の一つで、包括性を備えた非言語的な知。一般的に、個人的な経験により得られる言語化しにくい知識（ノウハウやこつなど、身体知ともいう）とされ、図書、論文などに記述された知識（言語で明示的に表現された知であり、形式知と[呼ばれる](#)）と対比される。一般的に暗黙知の多寡で形式知は大きく左右される。